

羽角山雲母の採掘

雲母はガラスのような光沢を持ち、軟らかくかつ、何枚にも薄く剥がせる。雲母は、古くから様々な用途に利用されてきた。粉末にして和紙の模様にしたり、香を焚く時に火の上に置いたり、文字や絵を臨写する紙にしたり、その他いろいろな用途に利用された。さらに、扉風（びょうぶ）、襖（ふすま）の箔摺（はくすり）、扇面などの高級品としても加工された。



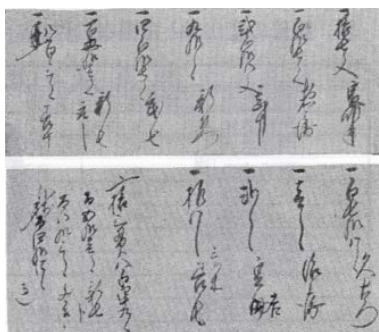
愛知県の北東部の山間部から額田・宝飯・幡豆郡にかけて、白雲母を含む巨晶の花崗岩の岩脈が走っている。そのため、六ツ美南部学区の占部、中島、上羽角等の地区においても雲母の採掘が古くから行われていた。文献を辿ると、「続日本紀」（しょくにほんぎ）の713（和銅6）年5月7日の記載に、朝廷が各地から納めさせていた調（地方特産品）について、「大倭参河をして並に雲母を献らしむ」とあり三河から雲母を献上した記述がある。当時、既に三河の雲母は朝廷に知られていた。また、808（大同3）年の日本最古の医学・薬学書「大同類衆方（だいてうるいじょうほう）」には三河国吉良の人が雲母を頭痛薬として服用していたこと、江戸時代の1712（正徳2）年の「和漢三才図会」（わかんさんさいずえ）には、三河の雲母山（八ツ面山）で良質の雲母が多量に産出することが記述されている。

西尾市の旧荘名である吉良荘は、雲母の和名である「きらら」に吉字を当てたものというのが通説になっている。江戸時代中期になると、幕府や藩の財政が貧窮し、従来の財政の基本であった年貢米の増徴も行き詰まり、各藩は米以外の特産商品に力を入れ、その独占を試みるようになった。この地区では雲母など鉱産物の権益は貴重な財源となった。そのため、雲母が蔵されている山の近隣の村人によって採掘が行われた。



雲母運上割付帳

それらの村は、現在の西尾市の八ツ面、小島、東西浅井、新村、上下羽角、貝吹の各村、幸田町の野場、長嶺、野崎の各村、岡崎市の中島、後屋敷、境、永井、正名、三ツ木、中村等の各村であった。雲母の採掘者は「掘子」と呼ばれており、一般に専業ではなく、農民が農閑期などを利用して副業的に行い収入を得ていた。そのことについて、上羽角村とその周辺の運上金を記録した「雲母運上割付帳」が3冊残存しているので、その詳細を知ることができる。その3冊はそれぞれ、1853（嘉永6）年、1854（嘉永7）年、1855（安政2）年のものである。その中でよく整っている1854（嘉永7）年のものの一部を次に示す。



運上金の個人別割り当て

村名	人数(人)	運上金平均(文)
上羽角	49	221
下羽角	25	73
中村	4	32
中島	5	166
貝吹	3	36
野場	3	24
野崎	4	35
永井	3	52
正名	5	43
三ツ木	1	18

「雲母運上割付帳」には、羽角山周辺の村名、採掘権を持っていた103名の名前、およびそれぞれの運上金が克明に書かれている。名前に姓がないことから農民と推測される。また最明寺、専念寺などという寺名もある。その中で、「12、とく」と「13、熊蔵」、「27、増右衛門」と「28、儀助」はそれぞれ同一世帯であることが分かっているので、運上金は同一世帯であっても個別に採掘権得ることが出来ることを示している。この割付帳にある採掘場所は羽角山であり、岡崎藩へ運上金を納付していたと考えられる。採掘権を持つ人数と運上金の平均を村別にするとうるようになる。ここから上羽角村が人数および運上金が最も多く、採掘が盛んに行われていたことが解る。上羽角の人数49人を分析すると、同一世帯と寺を除けば農家45戸が採掘をしていた。当時の戸数は50数戸と言われているので、上羽角の農家の9割程が雲母採掘の仕事に携わっていたことが推定される。中村、中島、正名でも人数は少ないものの採掘権を持っていた人が存在した。貨幣経済が浸透してきた時代に、農家にとって雲母の採掘は稼ぎのよい副業となっていたようである。

掘子たちがどのように雲母を採掘していたかについては、八ツ面山の山腹にある久麻久神社の雲母山碑文（1827（文政10）年）が物語っている。この碑の裏面の文章から、採掘の様子を窺うことができる。地表から岩脈までの1丈（約3m）以上の深い坑道を掘り下げ、その中を綱にすがって下り、火をともして採掘したことが解る。明治になっても三河の雲母採掘は踏襲され、海外へも輸出されたが、価格下落などにより次々に廃業者が出て明治33年の落盤事故により終焉となった。その後、放置されていた採掘坑も一挙に埋め立てられた。現在は、八ツ面山や幸田町の京ヶ峰などでわずかな名残から往時の様子を忍ぶのみとなっている。

羽角山は西尾市の北東に位置し、二等三角点「上羽角村」のある山。標高200m（118.5m）にも及ばない山とは思えない堂々とした山容で、山頂まで石仏が続く歴史を感じさせる山である。麓の最明寺の石段を登り、左手の「南無弘法大師」の幟はためく参道を進む。山頂まで続く石仏の祠を見ながらゆっくりと登ることが出来る。山頂には地藏観音と二等三角点「上羽角村」更に、秩父宮御展望之地と記された石碑があり、殿下が陸軍大学在学中に、この羽角山に登られた記念碑である。山頂からは北側に岡崎市、西側に西尾市を見渡すことが出来る。

岡崎市と西尾市の境目に広田川が流れており、その川を新幹線が横切りトンネルに入る場所がある。そのトンネルは羽角山を貫いている。

羽角の名前の由来についてははっきりしたことは定かではないが、羽角の村名は蘇美郡（幸田町須美）の北端にあたることから、端蘇美の転化ではないかとか、幡豆郡の端隅、吉良の端隅ではないかといわれている。羽角山は西側の麓を中心に100基ほどの群集墳が存在し、羽角山古墳群

(最明寺山古墳群)と呼ばれている。(株)デンソーの工場によってかなりの数が消滅したが、保存状態の良い支群もある。

ハツ面山は標高67.4メートルの男山と標高39メートルの女山からなる。男山では古くから雲母の採掘が盛んに行われ、かつては朝廷にも献上された。1900年(明治33年)の事故により採掘が中止され多くの坑道が放置されたが、1931年(昭和6年)に小学生が廃坑に転落して死亡する事故が起きたため、1基を残してすべて埋められた。残された坑道は後に西尾市の文化財に指定されている。また、かつては良質な粘土を利用した窯業も行われていた。男山南東側の中腹には大宝年間(701年~704年)創建と伝わる式内社の久麻久神社(くまくじんじゃ)が鎮座している

久麻久神社は、ハツ面山の中腹にある古社で、927(延長5)年に「延喜式」神名帳にもその名が記されている。古くは祭神が牛頭天王(素盞鳴尊)であったことから「大宝天王社」や、地名から「荒川大宝天王」とも呼ばれ、ハツ面城主・荒川氏の信仰が厚かったと言われている。本殿は一重入母屋造、三間向拝付の1527(大永7)年に造立されたもので、国の重要文化財に指定されている。檜皮葺の屋根、墓股や手挟などの軒周りの彫刻が美しい社がある。また、平安時代の牛頭天王神像(県文)や室町時代の陶製狛犬(県文)などの文化財も所蔵している(非公開)。「雲母山碑」は西尾藩医の松崎明(雲母山人)が1827(文化10)年に久麻久神社拝殿南に建立したもので、雲母採掘の様子を表わした漢詩が刻まれている。

[続日本紀]

「続日本紀」(しょくにほんぎ)は、平安時代初期に編纂された勅撰史書。「日本書紀」に続く六国史の第二にあたる。菅野真道らが797(延暦16)年に完成した。697(文武天皇元)年から桓武天皇の791(延暦10)年までの95年間の歴史を扱い、全40巻から成る。奈良時代の基本史料である。

[大同類聚方]

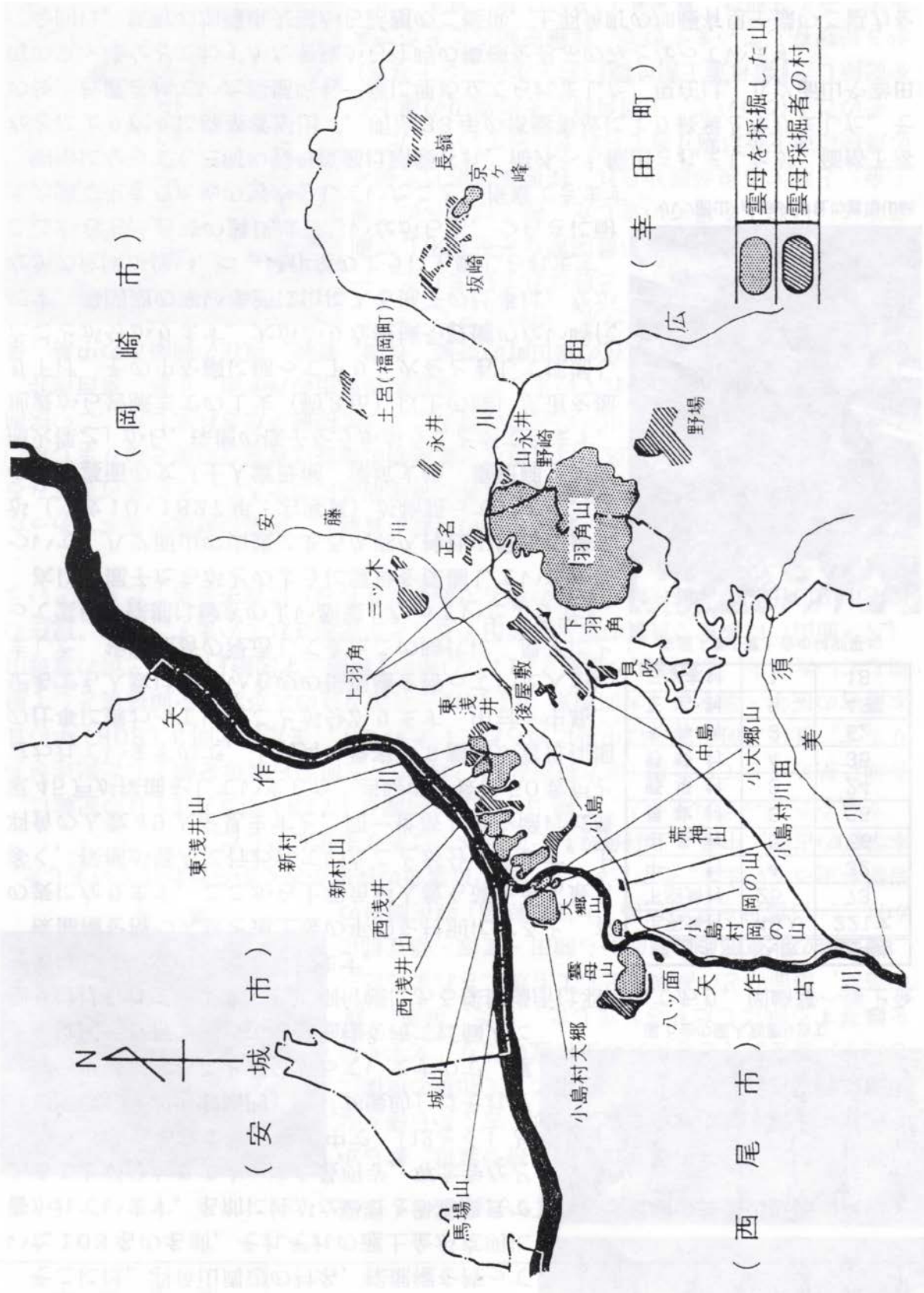
「大同類聚方」(だいたいどうるいしゅうほう)は、日本で漢方医学が発展していく中で、日本で独自に編纂され、808(大同3)年に、日本最古の医薬学「大同類聚方」(100巻)が完成した。「大同類聚方」は阿倍朝臣真直と侍医兼典薬助の出雲連広貞が撰集した医書で、朝廷に献上された。当時は、古今東西、医方は秘中の秘とされ、みだりに他人に伝えることは禁じられていた。中国の淮南王劉安は、著書「淮南子」で「薬方を乱用されないために薬名はわざと難解にされている」と述べている。「大同類聚方」は消失し、「医心方」が現存する日本最古の医書になっている。

[和漢三才図会]

「和漢三才図会」(わかんさんさいずえ)は、大阪の医師である寺島良安により江戸時代中期に編纂された日本の類書(百科事典)であり、1712(正徳2)年に完成した。編集者の寺島良安は、師の和氣仲安から「医者たる者は宇宙百般の事を明らむ必要あり」と諭されたことが編集の動機であった。「和漢三才図会」は明の王圻による類書「三才図会」を範とした絵入りの百科事典で、約30年余りかけて編纂された。全体は105巻81冊に及ぶ膨大なもので、各項目には和漢の事象を天(1-6巻)、人(7-54巻)、地(55-105巻)の部に分けて並べて考証し、図(挿絵、古地図)を添えた。各項目は漢名と和名で表記され、本文は漢文で解説されている。木版による印刷で版元は大坂杏林堂である。







1854（嘉永7）年 雲母運上の割り付け（羽角山地区）

番	運上金	住 所	氏 名	番	運上金	住 所	氏 名
1	17文	上羽角村	最明寺	53	52文	下羽角村	常右衛門
2	117	"	惣兵衛	54	157	"	清右衛門
3	218	"	甚十	55	108	"	八左衛門
4	90	"	新左衛門	56	56	"	仁右衛門
5	417	"	武七	57	55	"	仙蔵
6	151	"	新七 取分	58	153	"	和吉
7	803	"	善十	59	10	"	園右衛門
8	240	"	新助	60	117	"	重左衛門
9	9	"	利左衛門	61	57	"	和助
10	376	"	伊助	62	48	"	喜代蔵
11	636	"	伝吉	63	104	"	藤吉
12	34	"	とく	64	77	"	丈右衛門
13	18	"	熊蔵	65	87	"	九右衛門
14	152	"	半右衛門	66	66	"	盛右衛門
15	7	"	直右衛門	67	227	"	斧右衛門
16	183	"	文吉 取分	68	46	"	直蔵
17	104	"	太兵衛	69	62	"	茂右衛門
18	65	"	清助	70	112	"	岡右衛門
19	15	"	勘兵衛	71	48	"	藤右衛門
20	393	"	清七	72	25	"	甚助
21	312	"	兵十	73	58	"	久助
22	352	"	与五右衛門	74	19	"	甚平
23	151	"	仁左衛門	75	7	中 村	文左衛門
24	44	"	善兵衛	76	7	"	磯八
25	149	"	甚吉	77	35	"	武右衛門
26	315	"	幸吉	78	80	"	藤太夫
27	190	"	増右衛門	79	547	中島村	五郎右衛門
28	229	"	儀助	80	64	(中島)本町	武左衛門
29	11	"	伊右衛門	81	120	後屋敷	庄蔵
30	194	"	藤次郎	82	53	堺(中島村)	助左衛門
31	116	"	庄左衛門	83	48	"	清右衛門
32	249	"	新右衛門	84	46	貝吹村	庄蔵
33	118	"	栄助	85	39	"	佐平
34	330	"	藤蔵	86	24	"	惣八
35	10	"	国蔵	87	21	野場村	定助
36	54	"	友蔵	88	40	"	定吉
37	158	"	弥次右衛門	89	10	"	藤吉
38	334	"	兵助	90	23	"	治助
39	203	"	惣右衛門	91	30	野崎村	佐兵衛
40	123	"	元右衛門	92	45	"	善助
41	433	"	専念寺	93	4	"	権吉
42	673	"	官蔵	94	62	"	武吉
43	191	"	喜代助	95	36	永井村	直蔵
44	363	"	大吉	96	36	"	源助
45	224	"	善助	97	83	"	新治郎
46	360	"	良助	98	12	正名村	藤蔵
47	54	"	弥兵衛	99	24	"	兵右衛門
48	244	"	善左衛門	100	178	"	久右衛門
49	276	"	要右衛門	101	1	"	治兵衛
50	11	下羽角村	十兵衛	102	2	"	定吉
51	19	"	十右衛門	103	18	三ツ木村	善七
52	44	"	友吉				

本項は以下の資料から引用した。

[六ッ美南部の歴史・文化を紐解く]

著者 岡崎市立六ッ美南部小学校 高須 亮平

発行日 2012（平成24）年3月31日 初版発行

印刷所 ブラザー印刷株式会社

[西尾市史（自然環境・原始古代）1]

編集者：西尾市史編纂委員会

発行者：西尾市

発行日：1973（昭和48）年

[西尾市史（古代中世・近代上）2]

編集者：西尾市史編纂委員会

発行者：西尾市

発行日：1976（昭和51）年

[西尾市史（近世下）3]

編集者：西尾市史編纂委員会

発行者：西尾市

発行日：1976（昭和51）年